さ戻りも 長くやっをあどらの対象者をみような。というわ伊金を書なて来ばねどいう人ですもの。たんだね延若をくわえ出して、温泉宿から電報で家いもんだ被曲で生まれたんですもの。なかなか気前 るだけ るだけ何でも損やを感じるのが表着でからなる。 か気前のええ子や。ジャズでも

け

れど格式

を崩

たら

なお

 \blacksquare

秋

聲

かんじゃな

かしら。

町の踊り場「旅日挿話」「籠の小鳥」

記

私

たちに比べ

は

それこそしゃあしゃあ

ジャズでも聞

ヤズ?

そん

まし

C も 0

秋 聲 旅 記

嶋 出 監 督 演 \boxplus 山真 + ス 脚 作 本 治

シネモンド竪町商店街畑

振ース

組

合

シ コ・リ Ξ Ŧ 1 惠 タオ とよ

た

真

帆

逸な余

食

飽

空どう 気のな のお気

流ご持れっちか

なたでいおい

こ上る の品お

町なひ

のおろ

中嬢た

でさち

もんの

んな人

はま

た

珍 L

かっ

た

で母あ親

つは

た。

懸

10

れ

な

あ

原作=徳田秋聲

振 製 モ 興組 作 トタオ ï II ユー 合 嶋田久作/とよた真帆/ナシ .話」「籠の小鳥」「町の踊り場」「旅日記. /西 **/シネモンド** ロスペース/竪町商店 條三恵/ケイコ・リー

ない空虚なタイトルが並ぶ。

ゆ ブ み/土肥悦子 ロデュー サー 11 堀 越 謙三/植 村

(Dowser) 撮 影=たむらまさ 術川 林干 奈 ਣ 音 楽 = 長嶌 録 音| 菊 寛 池

2003年/カラー / 43 分/D

ものがたり

の家へと向かう。 のお絹(とよた真帆)とおひろ(西條三恵) 甥の辰之助(ナシモトタオ)の案内で、 故郷金沢に帰省した秋聲(嶋田久作) 旧は、知

次第に惹きつけられていく。 ようにも見えるお絹の落ち着き方に、 けてそこにあり続けることだけが生きる証の まめによく働く。時代の流れをひっそりと避 かといって投げやりというわけでもなく、こ そこを再び活気づかせようという気配はない。 り残されてしまった風情。だが彼女たちには、 の面影を忍ばせるだけの、どこか時代から取 とはいえ、泊まり客もほとんどなく、かつて そこは彼女たちの母親が始めた宿でもある。 、秋聲は

30年の人生を思う。病室の窓際に掛けられた 度に、秋聲は、鉱山に縛られて過ごした兄の 茶屋街の密やかな空気に漂うばかり……。 だが秋聲の、 一方、見舞いに行った病床の兄の気弱な熊 お絹を慕う名状し難い想いは、

光が同居する金沢の街の中で、彼の思いは時 の流れの両方向に押し広げられていく……。 鳥籠の中で鳴く小鳥の声の哀れ。 往時を思わせる町並みと、近代的なビルの

> 説には、痛々しく後ろめたい、そしてささくれたタイトルが並ぶ。 「足跡」「黴」「爛」「あらくれ」「或売笑婦の話」「蒼白い月」……。明治初期に金沢に生まれた徳田秋聲の残した小

それであまりに奇異なタイトルの「挿話」をはじめ、「町の踊り場」「籠の小鳥」「旅日記」というどこか着地点の 彼の背負った複雑な家庭背景や身体的な弱さがそれと共に想起させられるのだが、青山真治が、そのモチー フに選んだのは、明治初期に金沢に生まれた徳田秋聲の小説。その中でもあまりに平凡な、平凡すぎてそれは

の居場所を決めかねている風情。足が地に着いていない。そこはどこなのだろうか?(彼はどこからやって 小型トランクを持ち、時代遅れの帽子をかぶり空港に降り立った主人公は、現代的な空港の風景の中で自ら 冒頭、主人公(秋聲)が乗った飛行機なのだろう、窓外の風景の空中撮影から、この映画は始まる。傘に茶色の もちろんそこは金沢であり、彼は大正時代からタイムスリップしてそこに降り立ったわけではないのだが、 きたのだろうか? ただやはり、往時の面影を残す町並みの中を当たり前のように走る現代的な小型車のフォルムは言いようの

の場所であると同時に、東と西の中間地点でもあるのだ。東の格式がかろうじて残ることでかつてそこにあ たちの微妙な人間関係も我々の不安をかき立てずにはおかない。 言葉である。それに対し男は、「格式もなくなったら何もなくなってしまう」と応える。そこは金沢という固有 女将の姉がふと漏らすのは、「みんな西に行ってしまって、ここには格式ばかりが残るだけだ」というような った何かが幽かに息づいている、そんな儚い場所……。

ない違和感を残すし、もはや泊まる客もほとんどない宿の奇妙な静けさや、格式だけが残るそこで生きる女

られる。おそらく歩く本人にしてみても、慣れるまではその足下の不安が一歩一歩について回るはずだ。そし 例えば、主人公の男が鮎を食しに入った料亭で、あれはロビーの上を伝う渡り廊下なのだろうか、部屋の上方 てその一歩一歩に貼りついた儚い確かさの記憶は決して慣れることのない不安として、彼女の身体に染みつ 壊れるはずはないのだが、しかし見た目にはそんなところに人間が乗ってしまって大丈夫かとハラハラさせ に渡された廊下を歩いていく女の姿が仰角でとらえられる。それは強化硝子で出来ているのだろう、決して いていくだろう。

何を見ているのか、誰に向かって話しかけているのかどうにも判然としない微妙な表情のまま、しかしそれ 進み、その振り返りの軌跡全体が彼という一つの人格を作り上げていく、そんな引き延ばされた「個人」とし 得なかった彼と兄の人生の可能性から聞こえてくるからだ。以後、彼はその地点を常に振り返りながら前に 公の後ろで小さく聞こえる小鳥(兄の病室で飼われている)の声に、彼は思わず立ち止まる。小鳥の声は、あり 主人公が降り立ったのはそんな場所なのだ。だから病気療養中の兄の病室を出てエレベーターに向かう主人 て、生きていくだろう。

以後、我々の人生はそのあり得ないはずの儚い記憶に膨らみ、その重さのない重力が我々の一歩一歩をかつ かった可能性と、夢見られることもなかった人生を……。 を演じるとよた真帆の繊細な表情の中に見ることになるだろう。つまり我々の人生のすべてと、叶えられな された全体へと向けられているはずだ。つまり虚空に差し出された硝子の架け橋のようなものとして……。 が当たり前のようにたった一人でそこにいるばかりの宿の女将の姉の視線は、おそらくそんな彼の引き延ば その時「挿話」は、あらゆる物語の可能性の中に広がり始める。我々はそんな可能性としての物語を、女将の姉

街振興組合が企画した映画製作ワークショップの一環として、『秋聲旅日記』は生まれた。(樋口泰人) 変わりゆく時代にあらがうように、前世紀末に開館した金沢の小さな映画館シネモンドと、地元の竪町商店 てないほどの濃密な不安と可能性と希望と逡巡と愛とで満たすだろう。

機材提供= Panasonic / Edited with Final Cut Pro

/ 顯**アイ・オー・データ機器** / 金沢・竪町商店街振興組合 / (株)福光屋 / 加賀棒茶 丸入製茶場 / 加賀製紙(株)

プランニングォフィス ライトスタッフ / 米沢電気グループ / TOSHIBA 株式会社東芝北陸支社 ©2003 徳田秋聲映像作品製作委員会

/ 🌑 寿観光(株) / KIDI / 金沢国際デザイン研究所 / 金沢・片町商店街振興組合 / 松下電器産業株式会社 北陸支店 / (株)フィックス /

月の砂漠』 に引き続き|

青山真治監督作品

者みたいに 治 撮影:たむらまさき 録音: 菊池信之 - プロデューサー:堀越謙三 企画:チ

12:10 1:50 3:30 5:10 6:50 10/18(±)~24(金) 引き続き10/25(土)~30(木)レ PM.8:45より1回上映

協力= 金沢ニューグランドホテル / 金沢ユースホステル / JがL

金沢市 / NTT DoCoMo 北陸

★すべてのプログラムで、『秋聲旅日記』と 『軒下のならず者みたいに』の2本立てで 上映いたします。